

第4回(平成22年度)栃木県元気な農業コンクールいきいき農村部門受賞者紹介

☆ 農村活性化の部

(1) 審査経過

今年度の栃木県元気な農業コンクール(農村活性化の部)には各地から7事例の応募があり、いずれも個性にあふれ、地域の元気な様子が伝わってくるものでした。

審査委員会では、①自主的努力と創意工夫、②合意形成、③推進体制の整備と運営、④地域農業振興や活性化への寄与の4つの視点から各事例の審査を行いました。

この視点にもとづき、主催団体から5人の審査委員が書類審査による評価・判定を行い、さらに優良地区の現地調査を行い、各賞を決定いたしました。

(2) 受賞組織の概要

● とちぎ元気大賞(関東農政局長賞・栃木県知事賞)

棚田の郷かぶと(茂木町)

平成19年度から棚田オーナー制に取り組み、県内外の人々を積極的に呼び込むとともに、この取組をきっかけとして地域のコミュニティも活発化しています。また、大学生サークルとの連携や高校生による棚田ファッションショーの開催など、若い力を取り入れた活発な交流活動が展開されています。

さらに、中山間地域等直接支払制度や農地・水・環境保全向上対策の制度を効果的に活用し、美しい景観とともに農地の保全がしっかり行われています。

地域全体がまとまり、なかでも女性たちが元気に活動に取り組んでいる様子は、地域活性化のモデルとして高く評価しました。



棚田オーナーによる田植え



高校生によるファッションショー

● とちぎ元気賞(栃木県知事賞)

足利・名草ふるさと自然塾運営協議会(足利市)

里山の保全活動やホタルまつり、フラワーフェスティバルなど、名草地区の豊かな自然環境を活かした都市住民との積極的な交流が図られています。

また、地域の人材や資源を活かし、稲作体験をはじめ、大豆・そば・しいたけ栽培、炭焼き、昆虫飼育、ネイチャーゲームなど多様な交流プログラムの実践により、農村女性や高齢者の活躍・生きがいの場としても大きな役割を果たしている点を高く評価しました。

自然体験学習の拠点となる「ふるさと交流館」や周辺の環境整備も進められたことから、地域の活性化に向け、今後さらなる展開が期待されます。



多様な農業・自然体験プログラム



古民家を移築した「ふるさと交流館」

● とちぎ元気賞(栃木県知事賞)

絹ふれあいの郷交流推進組合(小山市)

主要産業であった養蚕や結城紬の衰退による危機感をバネに、関係者が一丸となって農産物直売所の運営に取り組み、さらに、学校給食への食材提供や加工品づくり、イベントの開催や農業体験の受入れなど収益向上に向けた取組を行っている点が高い評価となりました。

平成18年のオープン以来、近隣住宅への周知やイベントのPRなどはすべて自らの手で行い、地域の人気スポットとなるとともに、こうした頑張りにより売り上げも順調に拡大してきました。

女性部会が作る「まんじゅう」や「赤飯」等の人気も高く、女性たちの元気につながっており、直売所を核に、更なる地域活性化が図られています。



新鮮で豊富な野菜や加工品



豊島区小学生の農業体験受入れ

● 特別賞(栃木県農業協同組合中央会長賞)

粕尾ふれあいの郷づくり推進協議会(鹿沼市)

体系だった組織化が進められ、農業振興や農地利用に積極性が見られます。農産物直売所や農村レストランの運営、アイスクリームをはじめ地場産にこだわった加工品開発など、女性の活躍する場が形成されています。

さらに、美しい景観づくりなど、地域資源の保全活動にも積極的に取り組んでおり、評価しました。



農産物直売所「清流の郷かすお」

● 特別賞(下野新聞社長賞)

玉田集落営農組合(矢板市)

集落営農による農地の効率的利用や、環境にやさしい農業を目指し、畦畔へのハーブ植栽など特徴ある米づくりや園芸作物導入に取り組んでいます。

水田アートを契機とした消費者との体験交流活動は、玉田米の人気や価値を高め、営農と交流の両面で地域活性化につながっています。

また、地域から離れていても「長男会」という組織に加入し、地元の活動に加わるという後継者育成の取組も興味深く、高く評価しました。



4年目を迎えた水田アート



賑やかな田植えの様子

